2024年02月22日 読売中部 朝刊 名市内 14版 25頁

能登支援 炊き出し続く

春日井の団体

水道復旧の遅れ影響

能登半島地震で甚大な被害を受けた石川県珠洲市で、春日井市の災害ボランティア団体「愛・知・人」による被災住民への支援が、発生間もなくから続いている。今も多くの地域で上下水道が使えないことなどがあり、団体が過去に支援した被災地と比べても復旧のペースは遅いという。団体の活動は長期間に及ぶ見通しで、継続的な幅広い支援を呼びかけている。（中村亜貴）

赤池博美さん

「国の支援もっと」

地震発生から1か月余りが過ぎた今月5日。1万3000棟以上の家屋被害が出た珠洲市の山間部にある若山町中地区の車庫に、炊き出しを積んだ車が到着した。代表理事で会社員の赤池博美さん(53)らがみそ汁と炊き込みご飯を用意すると、周辺住民の列ができた。

「水が使えないので、なかなか料理ができない。家が半壊して家事どころではない人もいて、助かっている」。区長の新谷智さん(65)が感謝した。中地区でも断水は続いているが、自宅で生活する被災者は50人以上いるという。赤池さんたちは1日1食だけでも温かいものを食べてほしいと、各地の避難所や被災者が集まる集会所に今も炊き出しの昼食を届ける。自衛隊運営の入浴施設への送迎も行っている。

炊き出しの料理を配る「愛・知・人」の2人のメンバー（左）（石川県珠洲市で）

団体の設立は2011年。東日本大震災の被災地に赤池さんらが駆けつけて支援したのが始まりだ。その後、全国の現場で活動する中で、浸水した家屋の床下洗浄や屋根のブルーシート張りなどの技術も磨いてきた。

◇

ただ、今回は、近年赴いた他の被災地とは様相が違うという。16年の熊本地震や近年の水害などの現場では、炊き出しは2～3週間で終え、支援を次の段階に進められた。

能登半島地震では水道が復旧していない地域が多く、地震発生から50日余りが経過した現在も、活動の中心が炊き出しと食事の配達になっている。その合間を縫い、倒れそうなブロック塀の撤去やブルーシート張り、倒壊した被災者宅からの必需品の取り出し作業などを少しずつ行う。

元々宿泊施設が少ない半島最北端で、片道3時間前後の金沢市から往復する復旧業者やボランティアも多いため活動時間が短くなってしまうことも課題となっている。「2か月近くになるが、復旧が大きく進んだ実感がない」と赤池さん。「地元自治体の職員も被災している。国がもっと支援に力を入れてほしい」と要望する。

民間からの支援も十分ではないが、団体が過去に支援した被災地からの人材や物資の応援も増えている。春日井市の中学校や社会福祉協議会からは、壊れた屋根の応急処置に使う手作りの「段ボール瓦」も届いた。赤池さんは「食事や安心して暮らせる場など最低限の環境を整えた上で、できる限り被災者の困りごと全般の解決を目指したい」と話す。

団体では引き続き、寄付や支援への参加を求めている。問い合わせは、ホームページの問い合わせフォームから。

教育出版 国語 十協議